〈松戸市教育構想審議会講演記録〉

生涯学習のすすめ

木　田　　宏

目　　次

1．はじめに　1
2．臨時教育審議会の発足の経緯　2
　1．経済関係者からの注文　2．家庭内暴力が起こる
　3．校内暴力が起こる　4．ショッキングな二つの事件
　5．教育問題が政治課題になる　6．臨時教育審議会の発足
3．第一次答申について　4
　1．第一次答申の構成　2．教育の現状と問題点
　3．教育改革の基本的考え方
　4．当面の具体的改革提案
　5．国際的にみてすばらしい日本の教育
　6．社会の発展に対応できない教育
4．国際化の問題　8
　1．閉鎖的な日本の教育　2．外国の子供も日本の学校へ
　3．国際化が遅れる日本の教育
5．情報化の問題　10
　1．社会の進歩に遅れる学校　2．人間社会を大きく変化させる
　3．文明的変化への対応が迫まられる教育
6．高齢化の問題　12
　1．勤務年数より長い退職後　2．重くなる子供の負担
　3．教育費を越える老人医療費
　4．社会のシステムを変えて活力を生む
7．教育の「育てる」　14
　1．家庭で「育て」学校で「伸ばす」
　2．教育の基礎の「育」の問題
　　①小児科医の心配　②保育は家庭で　③学校へ家庭相談が
　　④子供の半分は片親
　3．学校の先生が気を使っていること
　4．教育のシステムが基本問題
　5．地域の人の協力で環境が変わる
8．学習するとは　17
　1．教えられることの限度　2．おもしろいから学習する
　3．生涯発展し続ける学習
　4．自分でスパートさせる　5．学習が生涯教育の本質
　6．スパートを助けるシステム
9．おわりに　20

「生涯学習のすすめ」

Ⅰ，はじめに

皆様から大変ていちょうなご紹介をいただきまして恐縮に存じます。

松戸市の教育構想審議会が今熱心にご審議いただいておりますが，こうしたことが市の関係ご当局の間から起こってくるということは，大変喜ばしいことでございます。私も思いつきのような意見でございましたけれども，初めの頃からいろいろとお付き合いをさせていただきました。

特に，教育長の庄司さんは，戦後間もなくでございますから，もう３０数年も前になりますか，私がこの千葉県にちょっとおりました関係で，早くからお付き合いがございました。そんな関係で，私を訪ねてくださったと思うのでございます。

今日，こうして皆様お集りの機会になんか話をするように，また，せっかく生涯教育のことを考えておられる，松戸市の教育構想審議会のご関係の方にも役に立つように，というご趣意であったかと思うのでございます。

当面，今ご案内のように，「なぜ教育がさわがれているか。」というところから，お話を進めさせていただきたいと思います。具体的に「どういうことを，どういうふうに生涯教育で進めたらいいか。」という点につきましては，既に審議会の資料としていろいろとご議論の材料が作られておりますが，その中でもうかなり立派な作業が行われているというふうに，私は思うのでございます。

ですから，具体のことにつきましては，皆様方の活発なお知恵にゆだねるといたしまして，「今日，私どもが立っております問題点がどこにあって，方向としてどういうことになるのか。なぜ生涯学習ということが大事か。」というようなことを，くどいかも知れませんがお話してまいりたいと思います。

Ⅱ，臨時教育審議会の発足の経緯

臨時教育審議会には，実は今日も引き返しまして出席するのでございますが，毎週一回夜９時半か１０時頃まで付き合わされるのでございます。

発足したのは，５９年９月でございました。しかし，これが発足するようになりました経緯には，長い歩みがありまして，日本の各地でいろんな教育上の問題が起こり，多くの方々がご心配をくださるという状態が，特に昭和５０年代の半ば頃から活発になってきました。教育の課題は，いつの時代にも絶えないのでございます。

１，経済関係者からの教育への注文

けれども，昭和５０年代の初め頃から，日本の経済関係の方々が経済摩擦を心配されまして，「今のようなことを続けていたら，日本は世界の人々から相手にされなくなってしまう。確かに立派な商品ができ，それでもうけさせてもらっている。しかし，この状態で日本の商品だけが売れていって，いろんな摩擦を起こすのでは困る。日本は生きていかなければならないけれども，それは相手をいきなりやっつけてしまうということでない，もう少し知恵の出し方があるのではないか。それと同時に，今までは相手の作った物のまねをして，それを上手により良い物を作るようになった。けれども，どうもそれだけではこれからの付き合い上困る。特に，日本も経済大国になり，世界の各地を日本人がとんで歩いている。そこで世界の人々とお付き合いをし，経済活動をしていかなければ一億の日本人が食べていけない。こういう現実を考えると，今までやってきた教育の仕方というのは困る。何とか変えてもらなわくてはいけない。世界中のどこへ行っても，一人で相手の人々と仕事が出来るような若い人が出てこなくては困る。」と，いうことから教育界に大変大きな注文が投げかけられるようになったのでございます。

２，家庭内暴力が起こる

一方，家庭の中でもいろんなことが起こりまして，「学校へ行きたくない。」といったさわぎが起こる。その原因は，今言われているような“いじめ”も当初からあったでしょう。しかし，家庭内での暴力事件というのもかなりひんぱんに起りました。親を殺す・祖父母を殺す，というような事件が各地に相次ぎました。そこで，親ごさんの方も子供を扱いかねるという状態になり，「こんな子供を生んだつもりはないんだけれども，全く言う事を聞かん。」だから，お金を出してでも「子供を引き取って鍛え直してくれ。」ということになったのです。その一番極端な例が，戸塚ヨットスクールだったかと思います。「そこで，どんな暴力があろうと，うちの子供は帰って来るな。」と。これくらい深刻な悲劇はないと思うのでございます。

３，校内暴力が起こる

そういう問題が，一方市民生活の中にじわじわと広がっていっているところへ，特に中学校で校内暴力が起こり，卒業式が満足に出来ない学校が全国各地に出てくる。「これはおかしいではないか，何とかしなければならん。」と言う声がほうはいとして高まってきたのが，昭和５０年代の中頃から後半にかけてでございました。

４，ショッキングな二つの事件

新聞の報道は一種のはやりみたいなものですから，ようやく「校内暴力の記事が少なくなりかけたかな。」と思っている時に，たて続けに二つのショッキングな事件が起こりました。一つは，横浜の浮浪者殺しの事件でした。昭和５８年の２月ちょうど今頃ですが，中学校の最高学年から中学校を卒業したぐらいの子供たちが，面白半分に山下公園の浮浪者を追っかけ回して殺しており，数日間分らなかったという。これは，「えらい世相になったものだ。」とびっくりしたわけでございます。その一週間ぐらい後に，東京町田の忠生中学校で校内暴力におびえた先生が，恐怖心からでしょう，脅しにきた子供を刺す事件が起こったのでございます。

５，教育問題が政治課題になる

そこで，今までたまってきた，教育に対するふんまんやる方ない気持ちが，ワァーと吹き上がったと思うのです。教育の問題が，今までは経済界の問題であったり，市民一人ひとりの家庭生活の問題であったのですが、いきなり政治の課題に取り上げられました。そして，５８年暮れの選挙は教育問題で争われることになり，「どうしても，日本の教育を基本的に考え直さなければならん。」と言う声が，５８年５９年を通じてほうはいと沸き起こってきたわけでございます。

６，臨時教育審議会の発足

そして，曲折はありましたが，臨時教育審議会が発足し，私も途中からですが，専門委員として，審議に参画をすることになったのでございます。

昨年の６月には，“第一次答申”ができ，今年の１月には第二次答申に向けて大変膨大な“審議の経過の概要その３”が発表されるようになりました。

最近の新聞を見る限り，教育論議はやや落ち着きを取り戻してきたように見えますが，この２・３年間は教育問題が出ていない日がないくらいに，新聞の中でホットな論議が繰り返されてきました。なお，その流れは続いておるわけでございます。

Ⅲ．第一次答申について

１，第一次答申の構成

“第一次答申”が昨年の６月に出ました。これは教育関係の皆様方お目通しをくださった方が多いかと思うのですが，大きく３つの枠組みになっております。
第１の部分で，問題にしている改革の基本的な方向とはどういうことかの説明をし，第２の部分に，審議会で取り上げるべき教育改革の課題とは何かをまとめて示し，第３の部分に，第一次答申として適切であったかどうか知れませんが，当面の具体的な改革の提言として，二つの提言しているわけでございます。

これは“第一次答申”ということになっておりますけれども，審議会が今の教育問題を論議していく枠をはっきりさせた，というふうに見ていただくのがいいのではないかと思います。

２，教育の現状と問題点

教育の現状と問題点ということでは，日本の教育が明治以来戦後も含めて，教育関係者の努力と国民の皆さんの熱意によって，素晴らしい発展を遂げてきた。初等中等教育の水準が高く，知的水準の高い国民が育成された。こういう評価をしておるのでございますが，ほめてある部分はその数行でございます。その後「しかし」と言いながら，いろんな問題を並べたてて書きました。記憶力中心の教育になっている，創造力に欠ける，個性のない同じ型の人間が出来ているんじゃないか。まあ，これは見方の違いでございまして，私なども「個性がなくってみんな同じと言うけれども，ここで議論しているのに，皆違ったことを言うてるではないか。私も皆と同じようなことを言うとるつもりはないから，十分に個性が育っとるぞ。」とこう言うのでございます。

しかし，お隣の韓国人から見ましても，「日本の人っていうのは，どうもみんな覆面をしてみこしを担いでいるようで，あの学生のデモみたいに見えるよ。誰に話していいか分らんのだ。「ワアー。」と群れをなして，みこしを担いでこちらへ押寄せて来るように受け取れるんだ。」と，親しい韓国の人が言いますから，まあ外から見ると，みんな同じような顔つきをして髪の黒い，そして背丈のスマートでないのが「ワアー。」とやって来るというふうに受け取られるんでしょう。

皆さん，海外に出てご覧になると分ります。事実，日本の人は皆集団で行動する人が多いんです。ＪＴＢの旗・日本交通公社やその他業者の旗のもとで，グループで動きまして，一人ひとりで観光旅行に行くというのは，よその国の人に比べてみると少ない。一事が万事で，この観光旅行団の海外における行動の仕方を見ておりますと，なるほど「皆が一斉に同じようなことをする。」と言われてもしようがな

いかなという面はあるのでございます。もう少し一人ひとりが，しっかりした個人として教育されるようにならなくてはいけないのです。

それには，大学の入学試験制度も具合が悪いぞ，大学の数は多いけれど本当に国際的に評価されるいい大学はできていないぞ，受験競争が加熱するし，登校拒否もあれば，校内暴力もあり，青少年非行が広がっていて，俗に言う教育荒廃の現象が広がっている。こういう罪状がいっぱい書いてあるのでございます。

その原因として，教育の場で詰め込みが行われているのではないか，教師の指導力が足らないのではないか，校長のリーダーシップも足らないのではないか。それは，いろんな事を指摘しますと，全部はずれているというわけではございませんから，当たる部分というのはかなりあります。ですから，そういうことをいっぱい取り立ててございます。

３，教育改革の基本的考え方

これからの改革の基本的な方向としては，①個性を重視していこう，②基礎・基本を大事にしよう，③創造性や考える力を養うようにしよう，④そして学習機会・選択機会を拡大するようにしよう，⑤教育環境をもう少し人間的なものにしていこう，⑥番目には生涯学習という考え方を徹底させなければいけない，⑦国際化，⑧情報化という新しい動きにも，対応できるようにしなければいけない。こういう，基本的な改革の方向を考えていこうというのでございます。

そして，これから臨時教育審議会が３か年の任期の中で，大きな８っの領域について，論議をまとめていこうというのでございます。

その８っというのは何かと言いますと，

１番目は，教育の目標を，この際はっきりと考え直す。

２番目は，教育のシステムを，生涯学習という体系の中で考え直してみる。

３番目は，日本の高等教育をもう少し立派なものにし，世界の人々が進んで勉強にこられるようにしたい。

４番目に，初等中等教育については，荒廃現象が起こっていると言うのですから，それをきちんと直さなければいけない。そのためには，

５番目に，教員の資質を高めることを考えよう。

６番目に，国際化の対応を図り，

７番目に，情報化への対応を図り，

８番目に，行財政の見直しをしよう。

以上のような観点に立ってやっていきましょうというのが，臨時教育審議会で“第一次答申”の際にみんなでまとめた枠組みでございます。

4，当面の具体的改革提案

そのなかで“善は急げ”で少しでも早く出来ることからやっていこうというので，その具体的な改革提案としては，

① 学歴社会というものを何とか直せないか。

② 受験競争の加熱を何とか是正できないか。

ということでございます。

このことについては，異論のないことだから，皆さんに呼掛けていこう。

そして，受験競争の加熱をなくすという点では，大学入試についての共通テストのあり方を考えたらどうだろう。高校入試の問題については，中高一貫という学校も考えたらどうだろう。松戸市のように市立の高校があるのだったら，それは中高一貫の学校にしたらどうだ。こういう提案になるのでございます。

そして，最初出した二つの提案は，大上段に振りかざした臨時教育審議会としては，「あまりにもちゃちなことを言ったのとちがうか。」という反省もありました。

第二次答申を，今年の４月を目途として出すについては，「ひとつ十分な論議をしよう。」ということでございました。その論議が２１万語という膨大なペーパーに集約されて発表されたというわけでございます。

こういう流れをたどって，教育改革が論議をされているわけでございます。何故，どうして，教育改革という問題が起こってきたかという点については，ご関心をお持ちの皆さんが，「その出発点に立ち返って，考えてみていただく必要がある。」と，思うのでございます。

5，国際的にみてすばらしい日本の教育

臨時教育審議会の“第一次答申”は，日本の学校教育は欠陥だらけであるというような報告になっていますが，私が教育研究所に昨年まで勤めておった間，海外からこられる方々は，「どうして，日本はこんなにすばらしい教育になったんだ。そして「世界の各国と比べてみて，こんなにすばらしい教育であるのに，何が不満で今直さなければならないのだ。」と，いうような見方をされるのでございます。

確かに，よその国と比較して，日本の国の教育を考えてみますと，みんな学校へ行っている，これは大変なことなのです。小学校だけでなく，中学校へも行き，ほとんどみんな高等学校まで行っている。これは，世界一高い就学率でございます。

そして，アメリカの人などは，「日本の学校は荒れている。」と言うが，学校へ行って見ると，「いやいや，自分のところと比べたら問題にならないくらいにきちんとしているではないか。学校の先生もしっかりして教えているではないか。何が不満なのか。」と，言うのです。これは，中南米の人達も同じでございます。

「日本ほど，夜どんな下町を歩いても安全な国はない，こんなすばらしい国にしたのは，日本の教育ではないか。」と言ってくれます。確かに，そう言われますと，世界の大都会で日本の都会ほど外国人が自由にかっぽできる所はありません。どこの国でも治安は悪いのです。日本にいるような調子で，一人でうろうろしていると，やられてしまうというケースはいっぱいあるのです。そして新聞でご覧のように，ローマであれパリであれ，まあ日本でも爆発騒ぎは起こりますけれども，もっとすさまじいのがバンバン起こるのです。ですから，海外から来る人は日本の素晴らしさを高く評価し，それは「みんなが学校へ行ってきちっと勉強し，学力もつけているからだ。」と言うのでございます。学力では，数学の国際比較を国立教育研究所が音頭をとってやりました。また理科の国際比較をやっても，「やっぱり日本はいい。」ということになるのでございます。

6，社会の発展に対応できない教育

けれども，国内で見ていますと，先ほど申し上げたようなたくさんの病理現象が起こっています。何故このような問題が起こるのかと言いますと，実は，明治以来の日本の教育発展が成功したからであると思うのです。明治以来，日本は欧米の先進諸国に遅れを取ってはいけない。また，教育で能力や技術を身につけることが，一人ひとりの身を立てることであり，国を興すことであると，一生懸命努力してきたのです。その教育の成果が非常に上がり，世界の人々が，びっくりするぐらい立派な製品が出来るのです。その結果「日本で作った物は品質がいい。」と喜ばれ，地球上の隅々まで買われるようになったのです。確かにそういう経済の強さ，日本の製品の立派さは，教育がすばらしいからだと思うのでございます。

１０年ほど前，一緒に役人をしておりました通産省の次官が「何だかんだと言うけれど，日本の教育がしっかりしているから，我々の仕事が伸びていくのだ。やっぱり教育を大事にしなくてはいけない。」と，励ましで言ってくれたことがございます。皆やっぱりそう思っているのです。そして，日本の製品が世界中に飛ぶように売れるようになった結果，いろんなことが起こってきたのであります。その意味では，明治以来の日本の教育が，個々の国民の資質を高めたことによって，日本の社会の発展を培ってきたのでございます。

そして，ふと気がついてみますと，日本の教育界が社会の発展に対応出来ていないという問題がいくつか起こってきたのです。

Ⅳ．国際化の問題

まず，国際化の問題でございます。これは今度の教育改革でも大事な観点の一つだと思います。

１，閉鎖的な日本の教育

一億の国民が生きるために，日本の商社は大商社に限らず小さい企業まで，どんどん海外に仕事の場を求めて進出しております。進出と言う言葉が悪ければ，向うの希望に応じていろんな事業をしています。今仕事のために海外に永住する人がどんどん増えていきます。当然ながら，子供や家族を連れて行きます。そうすると，その子供がよその国の学校に出入りをすることになります。海外に行った時に向こうの学校は気持ち良く受入れてくれるので，子供はあまり傷められません。ところが，日本へ帰って来ると「日本語が少し怪しい，舌がもつれる。」「海外に行って来たからといって，いい顔するな。」と言って，なぶり者にされるのです。だから，「日本に帰ってくるのが怖い。いやだ。もう一遍海外へ行きたい。」と子供たちが言い出すわけです。こういう状態というのは，いくら日本の教育水準が高くても，これでは困るのでございます。

また，日本にもいろんな国の人が入ってこなくてはいけないのに「よその国の人が入って来るのは困る。」と言うのです。それでは，これからますます日本人がたくさん国外へ出て行き，日本の教育が世界各地に広がって行かなくてはいかん時に，全く話にならないのです。そういう国際化・留学生の問題を考えても，「日本が閉鎖的であり過ぎる。」と，皆が実感することになるわけでございます。

一緒にスクラムを組んで立派な教育にしたのはよかったのですが，相手を寄せつけないという教育制度であり，同じ日本人でありながら「日本語が怪しい。」と言っては，なぶり者にする，いじめる。こういう根性は全く困るのであります。ですから，この問題に対してどうするかを，日本の教育界は真剣に考えなければならないのです。この松戸にはそういう関係の方が，やや多いのではないかと思います。

２，外国の子供も日本の学校へ

筑波の研究学園都市に，竹園東小学校という学校があり，３０名くらいの外国の子供が入っています。研究学園都市には，アメリカやイギリスという先進国だけではなく，東南アジアや中南米の各国からも研究者が来ており，日本の研究者と一緒に研究をしています。ですから，英語だけでなく，いろんな言葉の子供が，家族と一緒に来ているのです。

研究も国際化しなければいけないのに，研究者の子供たちが，日本の学校に入れないというのでは具合が悪いのでございます。

日本語でも英語でも具合が悪いという子供を，相手にしない学校では困るのです。日本の教育制度は，世界の子供たちに対しても，暖かい手を差しのべて，一緒に勉強できるようにしてやらなければならないのです。そうなってこそ，日本人が外国人と付き合えるようになるのです。それは，日本全国からみればごく局部的ですが，そういう現象が，今あちらこちらに起こりつつあるのでございます。

3，国際化が遅れる日本の教育

この問題は，２１世紀に向けて日本がもっともっと国際社会で活躍をし，世界の人々と一緒に仕事をしていくためには，どうしても今から，ものの考え方・対応を変えて取組まなければならないのであります。

要するに，あまりにも鎖国的であり過ぎるのです。出島を通して外国の状況は，確かに聞ているが，日本には一歩も入れないという鎖国状態が，日本の教育界にあるのです。これを直しましょう。確かに社会の方がそっちへ進んで，皆日本人がそういう活動をしているのです。出島で商取引しているわけではないのです。それにもかかわらず，教育界は，出島で仕事をしているのです。こういう状態は直さなくてはいけないのです。この点では，教育界の方が遅れているわけでございます。